

絞りだした声に答えるかのように、肩に置かれた手の指が食いこんできた。

「いい格好だな、衛宮切嗣」

優しいままの言峰の口調が、かえって異様に思えた。

肩の痛みにかえって意識がはつきりし、顔を向ける。澄みきった空と冷えた静けさのなか、言峰が自分の肩に手をかけていた。皴も埃もない黒衣は、おのれの墮落を許さない強い意思のあらわれだった。なめらかな布地が朝日に照らされ、その意思を強調するかのようだ。

火災以来記憶にひそみ、意識を浸食していた姿。払拭されたはずの夜と脅威の名残が、目の前にたちあらわれている。

「とうに死んだか発狂したと思っていたが――」

そこで初めて、言峰の声色が鋭くなった。

「いまだ生き延びているとはたいしたものだ。私としては、醜態を晒してくれたほうが愉しめるといふものだがね」

「期待に応えられなくて悪かったね」

肩に置かれた言峰の手が重くのしかかってくる。払い落とそうとしたが逆に腕をつかまれた。拮抗した腕が目に見えて震えている。いりまじった視線の向こうに記憶とおな

じ笑みがあつた。

呪縛に弱った身体が言峰の力にかなうはずもなく、やすやすと腕をひねられて身体の均衡を崩され、地面に手をついてしまう。アスファルトからじかに伝わってくる冷気に、掌が痺れた。

「老いたか」

言峰が片膝をつき、侮蔑の目で見おろしてくる。触れられた時になにかしらの力でも加えられたのか、内臓がねじれたように痛む。腕で上半身を支えるのが精一杯だった。

「貴様ごときが愚かにも世界を変えようとした報いだ。甘んじて受けろ」

髪をつかまれ、無理やり顔をあげさせられた。

「見てみるがいい。これが、貴様が変わえられなかった世界だ」

目前には海へとつづく流れが見える。時間がたつにつれますます明るくなった川面に反射がうつりこんで豊かに輝いている。冬にたたずむ、あたたかな平和。川を挟んで広がる家々の群像が冷えた朝に浮かびあがっていた。日光に照らされた窓のひとつひとつには、まだ眠りにについている人々の安らぎがある。